



中央大学学会白門化学クラブ支部

# 白門化学クラブ会報

第7号（総会案内・会員寄稿）



平成 25 年 3 月 31 日発行  
中央大学学会白門化学クラブ支部  
〒112-8551  
東京都文京区春日 1-13-27  
中央大学工学部応用化学科内  
白門化学クラブ事務局  
E-mail: hakumon-kagaku  
@gakuinkai.com  
URL:<http://www.gakuinkai.com/hakumon-kagaku/>

## 平成25年度総会・講演会並びに懇親会開催のお知らせ

会員の皆様には、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、これまで後楽園キャンパスにおいて支部総会を開催しておりましたが、今回は後楽園を離れ、中央大学ゆかりの地である駿河台で開催します。会場の本校駿河台校舎跡の中央大学駿河台記念館では会員談話室がリニューアルされました。また、長年中央大学関係者に親しまれた隣の龍名館本店で懇親会を行います。ご家族や会員でない方もお誘いの上、多くの方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

### 記

1. 日時：平成24年6月15日（土）13時30分～17時15分（予定）

2. 場所：中央大学駿河台記念館及び龍名館本店

① 総会：13時30分～14時00分

場所：中央大学駿河台記念館5階

（千代田区駿河台3-11-5 学員会事務局 電話：03-3219-6175）

② 講演会：14時00分～15時00分

場所：同上

テーマ：「シェールガス革命と日本」

講演要旨：今世紀に入り、米国でシェールガス開発が大きく推進した。シェールガスとは、頁岩層に封じ込められた非在来型資源の一つで、これまで経済的に掘り出すことが困難とされてきたが、水平掘り・水圧破砕等の石油産業上流部門における技術革新を背景に、開発が可能となった。シェールガスの登場により、LNG国際需給環境の緩和、欧州ガス輸入国の選択肢の拡大、ロシアの政治力の低下といった事態が進行している。日本は、東日本大震災後、原子力発電所の稼働率低下を主にガス火力の稼働率増加で補っており、その結果、LNG輸入価格が上昇、貿易赤字の大幅拡大をもたらした。シェールガス革命の恩恵を享受するためにも、日本はLNG価格体系の是正を進める必要がある。

講師：須藤 繁（帝京平成大学現代ライフ学部経営マネジメント学科 教授）

中央大学法学部法律学科昭和48年卒業後、石油連盟事務局に入局。1999年3月石油連盟退社までの間、1982～85年、在サウジアラビア日本国大使館勤務、1991～96年、ジェトロ・ロンドン石油資源部に勤務。石油連盟退職後は、三菱総合研究所、一般財団法人国際開発センター勤務を経て、2011年4月より現職。

移動（徒歩5分）

③ 懇親会：15時15分～17時15分

場所：龍名館本店 龍の間（千代田区駿河台3-4 電話：03-3251-1135）

3. 会費：会員並びに卒業生 8,000円 ご家族（中学生以下無料）2,000円  
会費は、当日申し受けます。

4. その他

① 受付は、総会・講演会会場入り口で行います。

② 懇親会での飲み物等ご寄贈を歓迎します。

③ 同封した「出欠はがき」は5月31日までに必着でご返信願います。

④ 当日連絡先：白門化学クラブ支部長 堀中 新一 Mobile Tel 090-3531-5680

以上

## 白門化学クラブ支部の皆様へ

突然の桜の開花、皆様には充分にお楽しみされたでしょうか。

白門化学クラブ会報第7号を予定通りお届けします。

これまでカラー写真で表紙を飾ってきましたが、旧後樂園校舎の写真がモノクロであるため、少々寂しいものとなりました。

旧後樂園校舎があった外堀通りには、かつて昼夜途切れることなく、工学部、文学部の学生が集った痕跡は微塵もありません。半世紀の時代の流れを感じます。

お知らせのように平成25年度の総会は駿河台で開催します。会場の7階建て中央大学記念館は高層のオフィスビルに取り囲まれてしまいました。ぜひ、学生街といわれた駿河台の変貌をご覧ください。

去る1月17日の平成24年度第2回幹事会において、支部設置申請を行っていた白門応用化学科同窓会(代表者 村上和雄)が[その他]の54番目の支部として承認されました。当支部共々、学会強化・活性化と母校の発展に貢献したいものです。

1953年、60年前の3月、工学部の第1回卒業生として先輩の方々が社会へ巣立ちました。以来、先生方の熱心なご指導と先輩方の努力と実績により、現在の応用化学科があります。節目節目の年に、その歴史を思い起こすと共に、先人に感謝したいと思います。

いま世界は大きく急激な変動と変化の中にあります。加えて日本では「フクシマ」を背負っています。私たちは変革を恐れず、果敢に取り組み、過酷な競争社会を乗り切っていくではありませんか。

支部長 堀中 新一

幹事長 近藤 明義

### 最高顧問中田常雄先生からの伝言

「平成24年度総会欠席と平成25年年賀状欠礼の弁です。2年ぶりの総会出席を楽しみに健康管理をしていましたが、当日の天候の変化に体調がついて行けず欠席させてもらいました。その後、皆様からご心配の電話をもらいましたが、つい弱気な言葉を吐いてしまい、余計な心配をおかけしてしまいました。現在、食欲は旺盛、少々太り気味なのでダイエットが必要なようです。ただ、歳相応に耳が遠くなり、足腰が弱くなり外出が思うようになりません。補聴器と車椅子でカバーできることを承知していますが、なんとなく使用を躊躇していました。皆様にお会いするために車椅子に挑戦しようかと思っています。」(平成25年3月26日)

## 人の動き

### 中央大学理工学部応用化学科

退任 教授 千喜良 誠（平成 25 年 3 月）

退任 客員教授 杉本 八郎（平成 25 年 3 月）

### 退職記念最終講義

千喜良 誠先生



平成 25 年 3 月 9 日（土）  
理工学部 5 号館 5 階 5533 号室  
講義題目：「DNAとの遭遇」

### 退職記念講義

杉本 八郎先生



平成 25 年 3 月 8 日（金）  
理工学部 5 号館 3 階 5334 号室  
講義題目：「Stay hungry, stay foolish」  
～ファーマ・ドリームの実現  
を目指して～

## 白門化学クラブ

訃 報（ご冥福をお祈り申し上げます）

田雑美百合氏（第 7 回昭和 34 年卒）平成 25 年 1 月 28 日逝去

小林生一氏（第 7 回昭和 34 年卒）

## 会員寄稿

### 喜寿を迎え、さらに前進

関口 勲（第6回昭和33年卒 東京都多摩市在住）

最近、年金、医療などで高齢者対策が話題になるが、特に「後期高齢者」なる医療被保険者証を受け取った時には怒りと共に哀れさを覚えることがあった。そこで、この制度をWeb ページで調べると、その基本的な考え方には、後期高齢者について①老化に伴う生理的機能の低下、②症状の軽重は別にして認知症の問題、③制度の中で、いずれ避けられない死という心身特性が挙げられていた。確かに、70 歳代には胆嚢と甲状腺半分の摘出手術などがあり、これに「あれ」「これ」の多用もあって、残念ながら①に、少々の②が該当し、③は自然体と解釈している。このような状況から無事に喜寿を迎えたので、これからは後期高齢者を冠にした医療制度のもと、可能な限り前向きな気力の充実が最も肝要と考えている。

第2の人生は、以前から興味があったガラス美術品の制作（パート・ド・ヴェール法）を定年直後から着手した。この技法は、古代メソポタミア地方で考案されたが、その後の吹きガラス技法の進展と共に衰退した。しかし、19世紀末にアール・ヌーヴォー時代に彫刻家のアンリ・クロによって再現された経緯があり、さらに多くのガラス作家達による技法の改良と共に現代に至っている。

制作工程の概要は、

- ①油粘土などで作った原型を泥しょう状の耐火石膏で石膏型をとる、
- ②原型を除去した石膏型にガラスの粉・粒、それに色ガラス粉を混ぜ合わせたものを詰め込む（ガラス類：同一の膨張係数）、
- ③このガラス充填の石膏型を電気炉に入れ、ガラスの熔解と流動に至まで加熱する、
- ④加熱後、徐々に冷却して固化した造形ガラスを石膏型（破壊除去）から取り出す、
- ⑤造形ガラスを水で洗浄し、乾燥後に表面を磨き上げる。

気に入ったガラス制作品2点は、昨年秋の自由美術展（国立新美術館）にて入選し、プロ作家から評価して頂いたことが今後の制作姿勢に大きな刺激になった。

主たる作風では花器、水盤などの実利的なものにアートを重ねる工芸よりも、球体をデザインソースとする視点からオブジェのように創作する。ここで、「球」は究極の多面体として不思議で、興味深い造形物である。このガラスアート創作以前に、実は造粒技術分野において均一な真球状粒子群の生成過程のアートの魅力に接したことが多く、これを切っ掛けとして自然界や人工物での球形態の探求が始まった。この調査は古代から現代にわたっており、未調査分はニュージーランド・Kohekohe ビーチの巨大石球のみである。この調査活動はそろそろ纏めようかと思うが、何時になるか特定できない。ガラスアートの方はプロの入り口にきたが、まだまだ修業が足りない。

なお、当クラブでのアート、ゴルフなどで活動する個人やグループ、また中国での美術交流を希望する方の情報を知りたい。

(kanko8453@gmail.com URL:<http://www1.ttv.ne.jp/~sik1>)

## 会員寄稿

### 「サプライズ」あれこれ

永井 仁（第9回昭和36年卒 神奈川県鎌倉市在住）

小生は昭和36年の卒業から今年で52年になります。その間のサプライズをお話いたします。皆様にはサプライズでなかったらご容赦ください。

初めは昭和35年の4年生の夏、リュックと寝袋で、北海道20日間の旅の出来事です。斜里の先、ウトロの先岩尾別（この先は無い）のさけ養殖場の入り口の川は岩魚が群れをなして毛ばりて入食いでした。本州では釣り師には貴重な獲物でありました。次の斜里の浜辺ではハマナスの群落を大阪教育大女子卓球部員と観賞し、一寸ハッピーな1日もすぎ、層雲峡上川駅から旭川へと向かう車中で熊取の猟師の老夫婦会いました。

猟師の生活です。猟の期間は大雪山に入山し、通常は旭川で木彫りを製作して暮らしていました。春に雪の上を歩ける様になると、米と味噌だけで熊を見つけて1週間、10日も追跡します。飯のおかずはエゾリス等を捕食します。追跡中は1km以上離れているので、鉄砲を撃っても影響ないそうです。追跡中は雪上に簡易の片流れ屋根の小屋を木の枝で作り前側に焚火をします。屋根は枝を並べて唐松の葉やふきの葉でふきます。雪が積もると風を防ぐためにかえって暖かいそうです。雨具は落の葉を重ねて羽織ましたが今はビニールに変わったそうです。熊の出てくる場所に先回りして待ちます。銃は単発式の村田銃で予備弾を1個左手に持ち射程距離を待ち、発射します。急所はずし逆襲に会い大けがをした事もあったそうです。エゾ鹿は雪の時期にスキーで3~4人で深い積雪の谷に追い詰めてしとめます。奥さまは年なので猟は止める事を望まれていました。話に引き込まれ旭川まであつとの間でした。

今年2月4日、中大技術士会と都市環境工学科との共同研究会（南太平洋に百万kwhのソーラー発電筏を浮かべる）に行くとき、水道橋のラーメン店にラーメンの歴史の載った季刊誌がありました。

- 1955年 大勝軒永福町に開業
- 1958年 日清チキンラーメン発売
- 1960年 森永がインスタントコーヒーを発売
- 1961年 大勝軒東池袋店開業
- 1964年 サッポロ道産子ラーメン開業
- 70年代以降フランチャイズ店が急速に普及

1960年の4年の卒業設計はインスタントコーヒーのスプレードライヤーにしました。設計手法、原液の物性の調査で国会図書館に3週間、通いました。国会図書館は赤坂離宮（現、迎賓館）にあり、内部はベルサイユ宮殿式でしたが、多少くすんでいました。便所の男性便器は幅が80cm、高さが床から150cm位の半円形で赤、黒等の全て大理石で作られていました。ベランダからの庭園も素晴らしいものでした。その後訪れる事がなかったの

でその節に沢山、内部を見学すればよかったと今に思うと残念です。

卒業式まで九州旅行に出かけ、屋久島の登山に鹿児島港から船で向かいました。種子島で船中泊し翌日屋久島に行きましたが、種子島港の近くの公園で飯合炊飯していたら子供達がシロめしだと、話すので、訊いたら家では芋飯と云ってました。屋久島の民家で昼食をご馳走になりましたが、芋飯でした。屋久島もコメの生産が少ないので一般家庭は芋飯が殆どだそうです。帰りに宮崎駅まで行きましたが駅前の旅館には集団就職の中学生が夜行列車の発車間で休息しており、旅館ごとに東京、大阪等の行き先別ののぼりがありました。電灯がやけに黄色く輝いて、駅前がなんとなくざわついた妙な夜でした。昭和32年の経済白書はもう戦後でないと思いましたが本当の戦後は万博まであと十年あったと思います。

大気汚染物質のNO<sub>x</sub>規制関連の話です。オランダのガス会社ガスユニ社の燃焼実験場に昭和43年秋、2ヶ月間大型バーナーのテストに参加いたしました。水冷式の5,000L/hが重油換算で燃焼できる設備でした。実験でNO<sub>x</sub>の連続測定を初めていたしました。計器は米国製で定価は1,000弗でしたがホスターウイラー社が貸してくれました。この計器がのちに大変役立ちました。1970年NO<sub>x</sub>規制の素案を通産省鑄鍛課と日本工業炉協会で作成した時、原稿を作成しましたので、オブザーバーで通産省の会議室窓際に居ましたら大通りを70年安保のデモが通っており、10年前は60年安保デモの中に居たことを不思議に感じました。

その後、環境庁からNO<sub>x</sub>規制が提示されましたので前記のNO<sub>x</sub>連続計を購入し、他社より早く低NO<sub>x</sub>バーナーの開発に成功しました。しかし、小生が購入する時点ですでに東電、関電、東ガス、大阪ガス社は1台ずつ購入済みで情報力違いを感じました。

南米エクアドルの3,000mの高地のセメントプラントに試運転行った時のことです。首都キトも高地ですから到着後に高山病で頭痛が起きます。ホテルで1泊して頭痛がとれて移動を始めます。プラントサイトでも運転現場から2階の計器室に上るだけで息切れと動悸がひどいのでそろりそろりと上がらなければなりませんでした。駆け上がることはできませんし、危険です。

滞在中に街のお祭りがあり、闘牛に参加できました。闘牛場は野球場の大きさと、板塀で囲まれています。スペインで街中に放した牛に市民が直接関わって暴れた牛のスリルを経験する形式です。闘牛場に放された牛を闘牛場のフィールドに降りて皆で牛を興奮させて、牛が駆けて向かって来たら、蜘蛛の子を散らすようにフェンスに逃げ登ります。群衆の中を逃げるスリルと恐怖感が堪りません。また恐怖にヒキツリ逃げた自身の無様さに恥しさがこみ上げます。建設マネージャーが逃げる時に転んで擦り傷をした顔を見ると転んだ時にマネージャーの恐怖感の顔を思い出して含み笑いが生じました。市民闘牛は参加したら倍以上面白いものでした。エクアドルにはまだまだ面白いことがありましたが機会がありましたらお話いたします。

昨年6月、8回生の先輩、清水康光氏が亡くなりました。葉山の白門会での不夜城の氏を偲び、合掌。

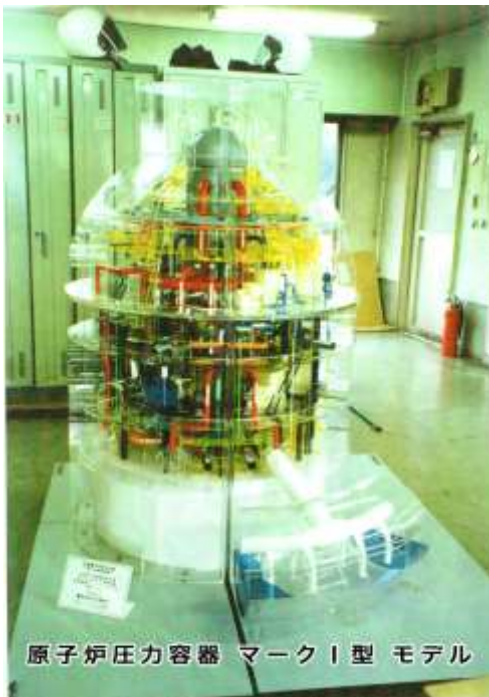
## 会員寄稿

### 物作り 46 年を回顧して

佐藤義明（第 11 回昭和 38 年卒 東京都練馬区在住）  
日本エンジニアリングモデル株式会社代表取締役

日本にエンジニアリングモデル（以下 EM と略す）を普及させた経歴を、かいつまんでお話しします。

私は昭和 38 年 3 月、工学部工業化学科を卒業し、4 月甲陽建設工業（株）に入社しました。（卒論は山田先生です）。会社では、プロジェクト部計画課で、タンクやプラント建設のプロジェクトのコーディネーターをしました。おかげで色々な設計（機械、土木、建設、配管、電気、計装）の概要や、プラント建設の現場の事が非常に短期間で覚えることが出来ました。昭和 41 年、日鉱水島製油所で半年ほど現場監督をし、8 月に甲陽建設を退社しました。在社丸 3 年半です。直ぐに東京の模型会社に就職し、日本の模型業界の内情を調べました。そして 42 年 3 月「日本エンジニアリングモデル株式会社」設立へと進みます。今年でちょうど 46 年です。



ここではっきりしたことは、この時代日本にはエンジニアリングモデルは、有りませんでした。絶対、この道具を日本の設計会社に採用してもらい、日本のエンジニアリングに貢献しようと言う、大きな夢がありました。

アメリカやドイツでは、1960 年頃から、プラント設計にはごく当たり前に EM が使用されていました。私の始める 7 年も前です。

所が、世の中そんなに甘くは在りませんでした。会社設立から丸 3 年間、ほとんど仕事らしい仕事はありません。もっぱら女房に飯を食わしてもらった時代です。でも、この間遊んでいた訳では有りません。東畑先生や後に日揮の専務をやられた成瀬さん他大勢の皆さんから、EM 普及のために応援を頂きました。しかし仕事は無い。やる気のあるとき仕事がないのは本当に惨めです。弱音を吐きかけた頃です。天は見捨てませんでした。

昭和 45 年 4 月、東洋エンジニアリング（株）から、30 万トンエチレンプラントのモデルを一括受注しました。本当にうれしかった。これが無ければ今は無かったかもしれない。それほどのインパクトでした。

社員総動員し、それこそ泊まり込みで、6 ヶ月でこれを完成しました。



この1件で、モデルを利用した、合理的なプランと設計の効果が大きく取り上げられました。これを契機にエンジニアリング会社も、この道具を使ってみようという環境になり、東洋エンジニアリングはもちろん、日揮、石川島播磨重工業（現IHI）、三菱化工機、神戸製鋼他、大手プラントメーカーからの引き合いが相次ぎました。

まさにエンジニアリングモデル普及元年です。

プラント設計には、EPCが非常に大切です。即ち、エンジニアリング、プロキュアメント、コンストラクション、これが旨くかみ合うと良いプラントが出来ます。

モデルはプラント建設で、EPCの色々な段階で最大限有効利用され、設計の道具として大変評判になった時代です。昭和50年ごろからの原子力発電所の設計にもほぼ100%、モデルが採用されております。



石油化学プラント モデル

平成に入るとCADがどんどん発展し、ドラフターは消えてゆきます。

私がEMを始めてからの設計の流れは、1.ドラフターの時代⇒2.ドラフター+モデルの時代⇒3. CAD+モデルの時代⇒4. CAD+CGの時代、言ってみればCGがモデルに取って代わった感じでした。それでもプラント設計の基本はEPCで有る事に変わりはありません。

私の会社も、色々なものづくりの経験を生かし、「EMのその先へ」を合言葉に、シミュレーション、実験装置、動く模型、実機の製作、新製品の説明模型等々、私共の得意な分野にシフトして来ました。国や大企業の最先端技術に接し、それを作り上げると言うことは、年甲斐も無く、好奇心でわくわくします。

年を取りましたが、元気で物作りに取り組んで行きたいと思っています。

平成25年2月25日

## 会員寄稿

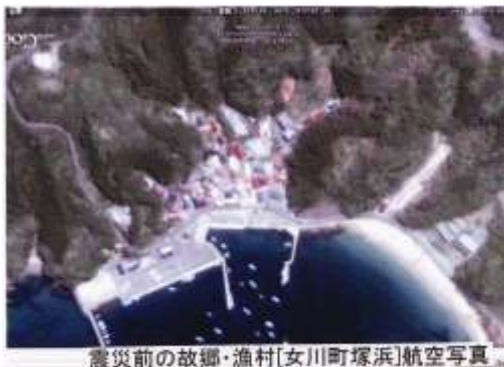
### 東日本大震災・津波で消えた故郷を訪ねて＝第2報(故郷の近況報告)＝

阿部富男（第13回昭和40年卒 東京都北区在住）

平成23年3月11日、東日本大震災・津波が発生しました。

あれから2年になりますが、一年半ぶりに昨年8月14日、仙台よりレンタカーで、姉・弟・妹と一緒に、先祖のお墓参りに行って来ました。途中、被災地女川港を通りましたが、一面荒れた平地となり所々に雑草が生えていました。平地の瓦礫は取り去られている様に感じましたが平地の奥まった山側に移されただけで大きく山積みにされた状態でした。港岸は約1.5mの地盤沈下したままで、1年半前とは変りはなく、何時から復興に向け動き出すのだろうか、復興には、20年から30年かかるだろう。ただ、ちょっと救われたのは、山あい仮設住宅がありコンビニ「セブンイレブン」が一軒営業していたこと、高台に仮設居酒屋が3軒ばかり、出来ていたことだった。女川港から被災地、我が故郷・漁村「塚浜」まで車で約50分程かかります。山の中腹を走り、青く美しい女川湾を眺めながら、途中4つの漁村を通るが、いずれの漁村も瓦礫は取り除かれていたが、壊滅的な状況はそのままだった。漁村の住民は山の中腹に建てた仮設住宅住か女川や石巻など散らばって仮設住宅住い。金が無く、舟も無く、漁具もないから、魚も取れない、ウニやアワビも取れない。銀鮭・ホタテ・蛎・ホヤ・ワカメ等養殖をすることも出来ないでいる。年寄りも、年金や生活保護で何とか生きている状態、若い人たちは将来どうすればよいか悩んでいる。これが、被災地牡鹿半島漁村生活者の今の状況です。

消えた我が故郷・漁村「塚浜」に着いて感じたことは、この海岸沿い集落には、大震災前（写真1）40数軒（人口約100人）あった、前回訪れた時には、一面瓦礫だらけの壊滅状態（写真2）だった。



震災前の故郷・漁村[女川町塚浜]航空写真

大震災前（写真1）



震災後の故郷・漁村[女川町塚浜]航空写真

壊滅状態（写真2）

今回訪れた時は瓦礫がきれいに撤去され、荒れた地面に雑草が生茂っており奥側に家が1軒残っていた（写真3）が、この家は60度ほど回転状態、15度程傾き、屋根と柱のみで内部は空っぽ、全壊状態だった。

沖合に1艘の小型船がいました（写真4）。聞くとところによると、一軒の銀鮭養殖漁師が

震災後「中古船と養殖用の生簀」を借金で買ったもので、苦勞して銀鮭養殖を再開したそうです。



震災後一年半一生懸命がんばり、この夏、市場に銀鮭数トン初出荷したところ、福島原発放射能汚染の風評被害の為一匹も売れなかったそうです。



当地、女川町塚浜にも、一山越えたところに、女川原発があるが「話しによると女川原発に依る風評被害ではなく」福島原発による放射能汚染に依る風評被害（宮城県は福島県の隣、海水は海流する）からとの事。この銀鮭漁師は、被災地我が故郷・漁村「塚浜」の復興第一人者と期待されたそうですが、倒産することになるでしょうとのことだった。何と不運な事でしょう、返す言葉がなかった。

また海岸に立って見ると、漁村集落民家だった所から10数メートル離れたところが海岸である。その海岸の堤防は、夏・海水浴客の駐車場・漁民船着場だったが、堤防・岸壁は1.5mも地盤沈下し、しかも、表面に大きなヒビ割れが発生し悲惨な状況だった（写真3）。この後、被災を免れた「山の上の」お墓に向かった。お墓に着いてあらためて感じたことは、何と立派なお墓群だろうと、このお墓群は、女川原発建設賛成で「貰った」お金で建てられたもの。もし、将来女川原発でも福島原発と同じようなことが発生したら、このお墓群だけが残り、このお墓群は無縁仏になるのではと思った。

やはり、原発はやめましょう。原発に頼らない社会にしましょう、と強く感じました。

お墓参りの帰り、高台の中腹に仮設住宅が4軒建っておりました。幸いその内一軒に知人、阿部さん家族3人（奥さん・母親）が住んでおり、いろいろ話す機会が出来ました。今は、中古船を安く買って釣り船を営んでいます、釣り客は1週間に土曜・日曜の2日間のみで、これで得た収入と、わずかな国の被災援助金でなんとか生計をたてているのが原状とのこと。将来の「住い」については、女川町との話合いで、山を高台にして住宅を建てる方向性は決まったが、工事の開始時期や期間は、決まっておらず、20年先か30年先かもしれない、どこまで当てに出来るか解らないという感じでした。将来の生活設計について悩んでおりました。これが東日本被災地漁村漁師たちの実情です。

大震災後、被災地のため私に出来ることは無いかと考え、今は母校女川中学校卒業生主催の「女川に元気を送る会」の会員として微力ながら被災地支援協力活動をしています。

以上、近況報告です。H25. 2. 22 記

## 会員寄稿

## 近況報告

宮崎智範（第26回昭和53年卒 静岡県富士市在住）

1月に堀中先輩より「近況報告」をとの原稿依頼を頂きましたが、現在締め切りの2月半ばなってもまだ書いていない自分に「学生時代から何も成長していないな」と苦笑しています。とは言っても題材に困窮しているのも事実で、締め切り間近の今に至っては取り留めのないことをつらつらと書くしかないと心に決め書き出しました。

現在、私はクミアイ化学とイハラケミカルの共同出資会社で静岡県磐田市に本社を置くケイ・アイ化成(株)に勤務しています。といっても、私自身は東京事務所勤務であり、生まれ育った同県富士市から新幹線通勤をしております。弊社には農医薬中間体や電子材料などの化成品事業、殺菌・防カビ剤などの産業用薬剤の機能性薬品事業、アスタキサンチン（ファフィア酵母）などのバイオ事業の3分野があり、私は理事業務部長という肩書で原材料、商品、外注品の購買などを行っています。興味が御座いましたら是非HPをご覧ください（[www.ki-chemical.co.jp](http://www.ki-chemical.co.jp)）。

仕事柄、中国など海外に行くことがあります。実は尖閣が問題となった昨年9/9-14 中国（上海9/9-11、青島9/12-14）に、PM2.5等の粉塵・煤煙が問題となっている今年1/26-29 北京（中国には1/24-30）に出張していました。

青島にはこの時が初めてでしたが、山東半島南岸の膠州湾湾口に位置し、市街地周囲は要塞の壁のように山が取り囲み、オレンジの屋根と白い壁を基調としたヨーロッパ風の建物が並んだ大変にきれいな街で、さすがドイツ人が作った街という印象でした（こんな言い方は失礼ですがとても中国とは思えない街です）。人口は870万人程度と聞きましたが、私の感覚では数十万-100万人程度と思いました（中国の市は大きく周辺地区を含みますので行政単位の人口は見た目よりも多いとのこと）。さて、青島でのジャスコ店等への暴動は私が帰国した翌日の9/15でしたが、尖閣諸島国有化は9/11でしたので既に影響があり上海で訪問した2社の総経理（社長）などからは尖閣問題についての考えを質問されました。余談ですがこの時の中国の報道は戦争となることを示唆していたとのことで彼ら自身も日本人の考え方を聞いたかったと思います。回答は「今、平和共存している独仏、英仏なども過去戦争を繰り返してきたことを例に挙げ、戦争回避の参考にすべきとしてきました（尤も私は中国語が解りませんので商社の方がどのように通訳したか不明です）。海外では自分の意見をはっきり言うべきと考えてきましたが、この時はいささか緊張しました。その後青島に入り、9/12,13と二夜歓待をうけ、9/14の帰国のフライトが午後であったため朝膠州湾を散歩しましたが何もありませんでした。報道では既に反日デモが行われていた時期ですが、この出張を通しこれといった反日運動もなく至って平穏でした（帰国後の報道には大変驚きました）。その後、「デモは中国政府が先導したある種のガス抜き」との報道がありましたが私自身も同感でした。しかし、その後の日本製品のボイコットは困った問題で、被害を受けた日本企業は大変なご苦労をしていると存じます。

次に先月訪問した北京ですが、この粉塵・煤煙は大変な問題でした。私は1/26夜遅く中国新幹線で北京に入りました。北京南駅からホテルまでのタクシーで何か靄っているなど感じましたが、これは気温が上昇したためかな、又目やのどの不調も感じましたがこちらも疲れ又は風邪かなと思っていました。翌日は日曜日であり折角の機会ですので天安門・故宮など名所旧跡（同行した商社の方の気遣いで故宮から2-300mという場所のホテルでした）を見学することとしました。ところが、相変わらず靄で視界が悪く数十m先がぼやけ、目は痛くのどは腫れているようです。それでも天安門、毛沢東の安置棟（建てた時代が異なるのですが天安門広場でのマッチングは非常に良く、同時代に建設したように感じられました。）、故宮と廻りましたが、これが限界で昼食も早々にホテルへ帰りました。翌日1/28の面談では商社の対応が悪く問題山積、工場見学は同日合流した者（彼は翌日も面談予定）に任せることとなるなど私の北京出張は散々なものでした。更に私は1/29に北京から上海に移動することになっていましたが、このフライトが靄のため3時間も遅れ、しかもこの内1時間半は飛行機の中で周りが全て中国人という中、日本人一人で待つこととなる落ちまで着きました。

尚、上海で出迎えてくれました中国の方（日本語の話せる上海人）に北京の粉塵・煤煙の状況を話し上海は良いと話したところ、彼女は「北京は最悪、上海は良い」と対応意識丸出しの模範解答がかえってきました。しかし、空港から面談会場の関連会社の事務所向かう車の中で上海の空を見ましたが、天気は晴天とのことでしたがどこか靄っていました。2枚の写真のどちらからも粉塵・煤煙の激しさがご理解頂けるかと思います。末筆ですが、中央大学学員会白門化学クラブ支部のご発展を祈念します。



「天安門広場での私」



「ホテルの窓越しからの故宮」

## 会員寄稿

### 中大技術士会の活動

金川 護（第8回昭和35年卒 横浜市青葉区在住）

私は昭和35年に工業化学科を卒業し、荏原インフィルコ（株）に入社し、平成9年に定年退職するまで水処理一筋の技術者として過ごしてきました。在職中の38年間の内、23年間は研究開発業務、9年間は設計業務、6年間は下水処理場や浄水場の現場で運転業務を行いました。その間に新製品開発で記憶に残るものは連続式活性炭吸着塔、高速濁水沈殿濃縮槽、プール用ろ過設備、震災時の非常用ろ過器、処理場向けジェットウォッシャーなどがあります。また、在職中に上下水道部門と総合技術監理部門の技術士資格をとりました。退職後平成11年に金川技術士事務所を開設し、現在に至っております。



仕事ではアドバイザー、鑑定業務、監査業務等と技術士試験対策本を3冊出しました。平成の初めころから日本技術士会に入会し、日本技術士会の活動を推進する、いろいろな委員を務めてきました。その後、私が中大卒の技術士は何人位いるのか、調査している内に当時の三宅常任理事（昭和35年法卒）から中大の技術士会を創ろうと進言があり、行き掛かり上私が会長となって、平成16年6月に白門技術士会を立ち上げました。以来、丸9年が経とうとしております。平成23年には学会支部に昇格し、中央大学学会中大技術士会支部となりました。

現在の会員数は約260名です。中大技術士会は主として中大理工学部的发展に寄与する事と、会員の研鑽を目的として活動してきました。中大技術士会には全ての理工学分野をカバー出来る人材がおり、理工学部を支援することが可能な学会組織として機能しております。発足当初から産学連携を進めたいと思っておりましてところ、平成20年から理工学部一年生を対象に「技術と倫理」の講座が開設し、毎年2名の技術士を講師に出させて頂いております。又、平成23年からは都市環境工学科四年生を対象に「技術者倫理」の講座に毎年14名の技術士を講師として出させて頂いております。殆どの学生は今まで、技術士と云う名称を聞いたこともなかったのですが、ここ数年は、授業時間の一部をお借りして、技術士ガイダンスを開き、学生に技術士を宣伝すると共に技術士一次試験を受験するよう進めております。24年度は500名の学生に技術士ガイダンスを行い、その結果、現役中大生31名が一次試験に合格しました。これは日本の大学で5番目であり、ガイダンスを行った効果があったものと思っております。また、受験した学生は今迄大学で勉強してき

たことを見直し、勉強する癖がついたなど、勉学にも効果があった様です。中大技術士会は先生方の研究の後押しが出来れば良いとの思いで、先生あるいは技術士以外の卒業生も巻き込んで研究会を作りました。

平成 20 年から応用化学科大石先生を中心に「CO<sub>2</sub>環境対策技術研究会」を立ち上げ、年 3~4 回工場見学と講演会をセットとした研究会を開催しております。毎回の参加者は 20~30 名です。平成 22 年からは都市環境工学科の國生先生の提案で「太平洋ソーラー筏研究会」を創設しました。これは太平洋の赤道付近に 5 キロ四方の筏を浮かべ、そこにソーラーパネルを敷いて原発一基分に相当する 100 万キロワットの発電を行うもので、20~30 年後の国家プロジェクトとして実現をめざしております。現在は年 6 回程度太陽パネルや蓄電池の研究者の話の聞いたり、筏構造の提案をしたりと可能性の研究をしております。また、精密機械工学科の中村先生のミニロボットの研究を実用化すべく、民間企業を誘致して平成 23 年から共同研究を行っております。実用化まで後一步と云うところです。我々技術士も先生方との連携の中で、わくわくドキドキする創造の喜びを感じながら、非常に楽しく理工学部にご貢献しております。将来の夢として中大の先生の発明を実用化するベンチャー企業を中央大学として育てられないかと模索しておるところです。このように中大技術士会の活動が中央大学の発展に寄与できることを願っております。

## 惜別

### 田雑美百合君を偲んで

栗原 功 (第7回昭和 34 年卒 神奈川県平塚市在住)

神奈川県丹沢山系『大山 (雨降山・標高 1,252m)』登山の玄関口の小田急電鉄・伊勢原駅を通る時に田雑美百合君の事をいつも思い出します。

去る 1 月 28 日の午後 3 時頃、田雑君の奥さんから電話があり、田雑君が肺炎の為ご逝去されたご連絡がありました。享年 77 才でした。ここ 2~3 年はパーキンソン病を患い、1 ヶ月前に新たな治療を受ける為、転院までして快癒する事を期待したのですが、残念ながら永久の旅に立たれました。

田雑君とは、私が平塚市に引っ越して家が近くなってからの付き合いで、50 年位になりますので、色々な思い出を書いてみました。

先ず名前です。最初『美百合さん』なので女性だと思いましたが、実際には身長約 185cm の学帽・学生服のよく似合う九州男児でした。長崎の近くの諫早市出身で、男兄弟が多かった事から、ご両親が女の子の誕生を願って『美百合 (みゆり)』と名付けたと聞いていますが、ご本人も大分困ったことがあったのではと推察しています。

卒論は、須藤教授の火薬学を専攻、身長 150cm 未満の須藤教授とよく工学部・水道橋校舎の廊下を並んで歩いていたのを思い出します。

就職は神奈川県伊勢原市にあり、電気計測器部品のトップメーカーの『株藤田電機製作

所』、並びに『(株)藤田化工』に入社し、最後は工場長・取締役を歴任、仕事面では品質管理や原価低減を推進し、会社の発展に貢献したと聞いています。

7回生は、毎年旅行を兼ねたクラス会を開催し、北は北海道から南は九州・沖縄まで全国の観光地を訪れ、各地のおいしい料理・お酒を頂きながら友好を温めました。第1回生の中田さんも2回ほど参加されました。特にここ十数回は、ご家族も同伴のスタイルに変えたので、田雑君も美人の奥さん同伴して毎回参加され、宴席ではカラオケを歌い、特に『吉幾三の酒よ』が十八番でした。九州男児の田雑君はお酒も強く、どんなに飲んでも乱れる事なく、酔った所を見た事がなかったと思います。

また旅行で思い出すのは、田雑君、本田君と三人で『立山黒部・アルペンルート』を旅行した時で、11月上旬なのに黒部ダム付近が猛吹雪の為、バスが出発せず信濃大町で3時間も待たされ、予定より大分遅れて宿泊予定の立山のホテルに到着できた時はほっとしました。翌日は宇奈月から黒部溪谷鉄道のトロッコ電車に乗り、寒さに震えながら終点の檜平まで行き、駅から15分ほど歩いて、有名な『名剣温泉』の露天風呂に浸かり、飲んだお酒の美味しかった事を思い出します。

『白門化学クラブ支部の総会』には毎年参加され、また田雑君、本田君の協力を得て毎年七夕の頃で開催した『白門化学クラブ・湘南会』にも参加されて、先輩・後輩の方々と楽しく飲み・語らい友好を広げていました。

旅行仲間、飲み仲間だった田雑君が愛飲していた麦焼酎の『いいちこ』で、一緒に飲むことが出来なくなり誠に残念でなりません。

最後になりますが、長い付き合いに感謝すると共に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



伊豆・浄蓮の滝にて（伊豆の踊子像の前で）

右から2人目が田雑君





60年前の卒業アルバムです。このアルバムには駿河台校舎と水道橋校舎の写真がありますが、後楽園校舎は入っていません。



#### 編集後記

皆様のご協力のおかげで、無事編集も終わりました。今回の編集を通して、皆様の母校に対する思い入れや、助け合いの気持ちを感じることができ、とてもすがすがしい気持ちになれたことが、一番の収穫でした。大変お世話になり、ありがとうございました。(会報担当幹事 根津)

表紙写真(上) 後楽園校舎(中央大学大学史編纂課所蔵)

(下) 後楽園校舎跡地方向を外堀通りを跨ぐ後楽園橋から見る(手前から黄色いビル、住宅金融支援機構一旧住宅金融公庫)